

学校課題と学校経営

金 井 正¹・高山 芳 樹²

1 目 的

現在の教育を取り巻く環境の変化を学校現場では実感している。少子化の進行、知識基盤社会への移行、急速な情報化の進展、価値観の多様化、学校教職員の世代交代など。また、これから数年の変化は明確、具体的に見えてきた。2020年度から小学校の新学習指導要領の完全実施、翌年には中学校となり、更に翌年高等学校も年次進行で続く。大学入試改革である2020年度（平成32年度）の「大学入学共通テスト」の導入もある。まさに「生きる力」を付けるための学校教育の具体的変化であり、「学力の3要素」（1.知識・技能、2.思考力・判断力・表現力、3.主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）の育成・評価である。10年後の児童生徒の姿を捉え、変化を乗り越え、吸収していく柔軟性を、今まさに学校では必要としている。このためには、学校教育を支える一人一人の教職員に指導力を付けていくことを基本に置きながらも学校の組織的な働きが大切と考える。この力を「学校力」と呼び、その向上のための方法は如何に有るべきかを考えていきたい。

「学校力」を「児童生徒を成長させる学校の組織的な働き」と捉え、授

¹白鷗大学教育学部

²小山市立大谷東小学校長

責任著者e-mail: kanai429@fc.hakuoh.ac.jp

業を中核に教育活動の質を高めていくための方策について検討していくことが大切である。教職員間のコミュニケーションを活性化し、教育実践をより高めていこうとする雰囲気や風土をつくり、課題の克服に向けてのプロセスを共有することによって、「学校力」は高まっていく。そのために、教育活動の全てに学校としての基本姿勢が貫かれ、教職員による指導の軸がぶれないことが、教育効果を上げることに繋がる。

学校経営は、学校教育目標の達成にあると捉え、学校教育目標達成のため方法を教職員が一人残さず共通理解し、実践していくことは大変なことである。学校がチーム化していくこれからを考えるとさらなる困難を感じる。実際の学校経営を進める上で、学校が一体化していく具体的なものとして学校の教育課題の解明がある。「学校課題解明」である。

軸をぶれさせずに、全教職員が学び続け「学校課題の解明のための努力」をしていくため、しっかりとした全教職員の共通理解の上に立った学校課題の設定が必要である。そうすれば、全職員の教育活動のベクトルの向きが共有され、成果が現れるものと考えた。

そのために、自分の学校課題が、他の学校のものと比較しながら、共通性と差異を確認して行くことは、学校課題の設定をさらに充実させることに寄与すると考える。

以上のことから、今回の研究の内容は、以下の3点とする。

○学校（市町立小・中学校）が設定している「学校課題」の収集

栃木県内の市町村立小・中学校の全ての学校課題を収集すること。

収集は2016年度（平成28年度）と2018年度（平成30年度）の2年度とした。

○収集した「学校課題」の分析

- ・使われている語の使用頻度からの分析。
- ・使われている語がどのような関係性を持っているかの分析。
- ・2016年度（平成28年度）と2018年度（平成30年度）の比較。

○学校課題解明を軸にした学校経営の実践

実際どのようにすると効果的か。実践の事例をあげる。

今回、研究を進める上で、「学校課題」という用語以外で表現されている学校の研究課題については、上記内容と同質であるものであれば「学校課題」と捉えて、対象とした。このことにより、栃木県内すべての小・中学校を対象とすることが可能となった（分校、県立学校は除く）。

なお、今回の研究のベースとしたものは、平成25年3月栃木県総合教育センター編「栃木の「学校力」の向上」である。

2 方 法

本研究では、県内全小・中学校を2016年度（平成28年度）と2018年度（平成30年度）の2度調査した。

栃木県内には25の市町村と7つの栃木県教育委員会事務局教育事務所があり、それぞれが密に連携し学校教育、特に義務教育を中心に推進している。

学校数は平成29年3月8日現在で、小学校372校、中学校157校（分校、県立学校は除く）。平成31年3月3日現在で小学校360校、中学校154校、義務教育学校2校（分校、県立学校は除く）となる。

今回は、この全ての公立学校の学校課題を調査対象とした。収集にあたっては、各教育事務所の協力をいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

分析にあたっては、栃木県内の小学校と中学校また地域（7教育事務所）ごとに検討を行った。また、用語等の出現回数、関係性の分析にあたっては、「テキストマイニング」と呼ばれる方法で行った。テキストマイニングでは、コンピュータにより各学校の課題を単語の集まりと認識して頻度をカウントし、単語と単語の関係性の強さについても分析する。使用するソフトは、KH Coder（平成28年度使用Ver. 2.00 f、平成30年度使用Ver.3）とした。

また、各学校の学校課題を見てみると、同じ意味でもひらがなと漢字の違いがあった。本研究で使用したソフトの特性上、以下の場合には統一さ

せて貰った。

平成28、30年度については「はぐくむ」→「育む」、「いきいき」→「生き生き」、「一人ひとり」→「一人一人」、「学びあい」→「学び合い」、「とおして」→「通して」、「つけ」→「付け」、「わかる」→「分かる」、「共に」→「ともに」、「伝えあい」→「伝え合い」、「身につける」→「身に付ける」、「はたらく」→「働く」、「あり方」→「在り方」、「子供」→「子ども」、「アクティブラーニング」→「アクティブ・ラーニング」、「作り」→「つくり」、「3年目」→「3年次」。3年目と3年次は言葉の違いを統一したものである。平成30年度については、更に「めざす」→「目指す」、「持つ」→「もつ」、「よく」→「良く」、「かかわりあい」→「関わり合い」、「あり方」→「在り方」、「話合い」→「話し合い」、「・」→「、」、「」は取る。上記以外は原文をそのまま用いることとした。平成30年度の漢字への変更はKH Coderの分析度を向上させるためである。

学校課題に於いては、主課題と副課題がある場合が多く、その場合は両方を対象とした。更に、地区によっては、1校で学習指導面と児童生徒指導面の両方を設定している場合もあるが、今回の場合は学習指導面の学校課題のみを対象とした。

3 内 容

(1) 小学校、中学校の平成28年度と平成30年度学校課題用語出現回数比較

○栃木県内全小学校

表－1 栃木県全小学校学校課題
用語出現回数 比較

平成28年度		平成30年度	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
育成	269	育成	253
学ぶ	178	する	184
児童	169	学ぶ	183
する	168	授業	176
授業	155	児童	173
表現	116	主体	142
活動	109	考え	103
指導	105	学び	99
学習	101	表現	92
工夫	97	目指す	91
できる	95	工夫	90
考え	88	自分	89
自分	83	できる	87
子ども	78	学習	87
目指す	75	指導	78
主体	74	活動	73
伝える	69	対話	72
高める	62	子ども	61
自ら	62	力	61
力	61	深い	57
充実	58	自ら	53
考える	54	伝える	50
算数	49	高める	49
学力	47	考える	40
言語	47	充実	40
思考	45	学力	39
基礎	42	合う	39
思い	42	思考	39
分かる	40	ともに	35
基本	39	改善	33
ともに	36	深める	33
図る	33	向上	32
向上	32	国語	32
意欲	30	道徳	32
確か	30	豊か	32
学び	30	思い	31
合う	30	もつ	30
定着	29	教育	27
豊か	29	基礎	25
生かす	28	基本	25
生き生き	28	算数	25
国語	27	実践	25
育てる	25	取り組む	25
持つ	25	育てる	24
認める	24	実現	24
楽しい	23	分かる	24
取り組む	23	言語	23
子	22	確か	22
身	22	定着	22
付ける	22	生かす	21
教育	21		
心	21		

○栃木県内全中学校

表－2 栃木県内全中学校学校課題
用語出現回数 比較

平成28年度		平成30年度	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
生徒	100	生徒	90
育成	96	育成	88
学習	68	する	72
する	62	授業	66
指導	59	学習	63
学ぶ	58	主体	50
授業	56	学ぶ	49
学力	46	指導	48
活動	44	学力	44
目指す	43	目指す	44
充実	42	工夫	42
表現	39	活動	40
工夫	38	学び	36
主体	35	向上	35
基礎	34	充実	33
向上	30	表現	29
確か	29	自ら	27
基本	27	確か	25
高める	27	深い	22
思考	26	教育	21
意欲	25	対話	21
言語	25	基礎	20
自ら	24	思考	20
判断	24	高める	19
定着	23	実践	19
学び	18	定着	19
教育	18	できる	18
図る	18	意欲	18
集団	17	基本	18
できる	16	判断	17
身	16	力	17
付ける	16	身	15
取り組む	15	図る	15
分かる	15	家庭	14
豊か	15	改善	14
力	15	言語	14
実践	14	考える	14
推進	14	集団	14
心	13	推進	13
考える	12	向かう	12
生かす	12	児童	12
展開	11	心	12
育む	10	展開	12
		豊か	12
		取り組む	11
		付ける	11
		ある	10

小学校の学校課題に出現する用語で、平成28年度（2016年度）と平成30年度（2018年度）共に出現回数が上位の語を見てみる。

「育成」、「する」、「学ぶ」、「授業」、「児童」の5つの言葉は共に100語以上の出現を見る。変化をみると、「主体」が74出現から142出現（以下、74→142と表現する。）と大きく伸ばした。「学び」30→99と大きく伸ばし、「対話」3→72となる。「目指す」75→91、「道徳」1→32、「深める」0→33となっている。同様に0→14となった「家庭」がある。逆に「子ども」78→61、「伝える」69→50、「高める」62→49、「充実」58→40、「算数」49→25、「基礎」42→25、「基本」39→25となった。

（出現数21より少ないものは、表－1には出ていない。）

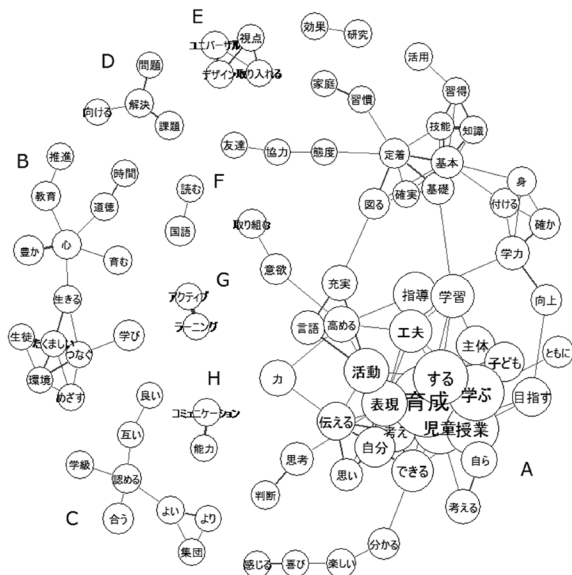
中学校の学校課題に出現する用語で、平成28年度（2016年度）と平成30年度（2018年度）共に出現回数が上位の語を見てみる。

「生徒」、「育成」、「する」の3つの言葉は共に上位3～4の出現である。それ以外にも「授業」、「学習」、「主体」、「学ぶ」、「指導」、「学力」、「目指す」は上位の出現である。「主体」は35→50と出現数を伸ばし、「対話」1→21、「教育」1→21、「深い」0→22、「家庭」9→14、も出現数を伸ばしている。逆に「指導」59→48、「充実」42→33、「表現」39→29、「基礎」34→20、「基本」27→18となり「道徳」は出現数2桁に現れてこなかった。（出現数10より少ないものは、表－2には出ていない。）

（２）語の関係性（ネットワーク）

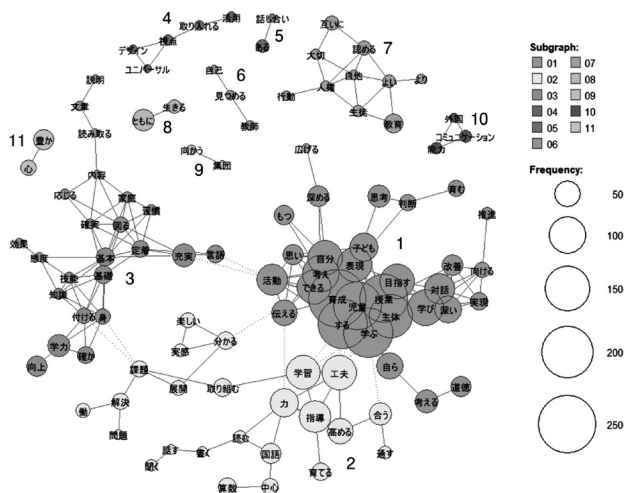
抽出語の関係性を線で結び、関係性（ネットワーク）を明確にした。関係性の深い語が太い線で結ばれている。使用ソフトの特性により、今回の目的達成に必要な範囲を選択した。その結果、出現回数の頻度数と関係性を重視したものとなっている。分析は栃木県全域と各教育事務所単位の地区に分けた。県単位では、学校数、出現回数が多いので頻度数を5とし、教育事務所単位では頻度数を3や2とした。用語と用語の関係性については県単位の集計ではJaccard係数（全用語数中の共有用語数割合）とし、

図－１ 平成28年度全小学校学校課題 出現語の関係性



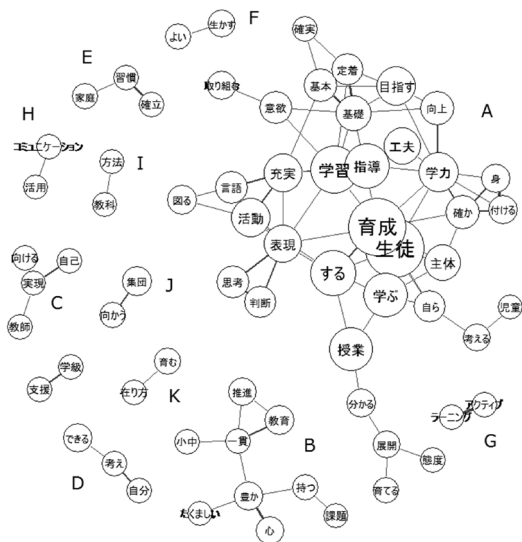
99

図－2 平成30年度全小学校学校課題 出現語の関係性



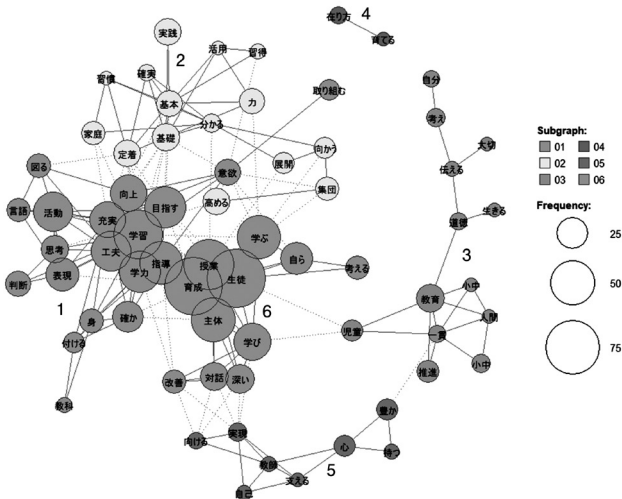
※ 出現回数の頻度数を最小値5、関係性を決めるJaccard係数0.15以上の語群を抽出

図－3 平成28年度全中学校学校課題 出現語の関係性



※ 出現回数の頻度数を最小値5、関係性を決めるJaccard係数0.15以上の語群を抽出

図ー4 平成30年度全中学校学校課題 出現語の関係性



※ 出現回数の頻度数を最小値5、関係性を決めるJaccard係数0.15以上の語群を抽出

○小学校の学校課題出現語の関係性（平成28年度と平成30年度）

平成28年度（2016年度）については、8の語群が見られる。特にA群は、多くの語が関係付いている。「育成」、「児童」、「学ぶ」、「授業」、「する」等が中心となり他の語が関係づけられている。「アクティブ」、「ラーニング」、「コミュニケーション」の語も見られる。

平成30年度（2018年度）については、11の語群が見られる。特に大きな3つの語群が見られ、1の語群は「児童」、「育成」、「学ぶ」、「する」、「主体」、「授業」等の関係であり、2の語群は「学習」、「指導」、「工夫」、「高める」等であり、3の語群は「基礎」、「基本」、「学力」、「付ける」、「図る」等の関係であり、1の語群と繋がりがあある。平成28年度（2016年度）にすればA群となるところである。10の語群には、「外国」、「コミュニケーション」、「能力」の関係も見られる。

考察すると、学習指導要領による学習指導を充実させることを学校課題として、学校経営を進めていることがわかる。また、平成30年度（2018

年度)は多くの語群が見られる。これは、現学習指導要領と2020年度からの新学習指導要領の前倒しのために多様な用語が使われているものと考えられる。

○中学校の学校課題出現語の関係性(平成28年度と平成30年度)

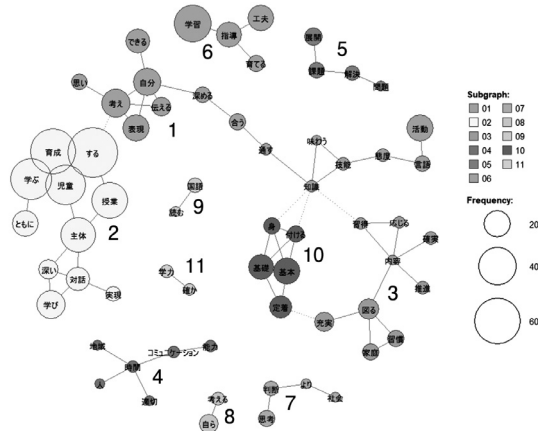
平成28年度(2016年度)については、11の語群が見られる。特にA群については、多くの語が関係付いている。「生徒」、「育成」、「する」、「学習」、「指導」、「学力」、「授業」等が中心となり他の語と関係づけられている。他には、「アクティブ」、「ラーニング」、「コミュニケーション」の語も見られる。

平成30年度(2018年度)については、6の語群が見られる。1の語群は「学習」、「学力」、「指導」、「工夫」、「活動」等であり、2の語群は「基礎」、「基本」、「分かる」、「定着」、「実践」等であり、6の語群は「生徒」、「授業」、「育成」、「主体」、「学ぶ」等であり、1の語群と繋がりがあある。この3つの語群は、平成28年度(2016年度)にすればA群となるところである。3の語群は「教育」、「一貫」、「道徳」、「小中」等である。5の語群には、「心」、「豊か」の語も見られる。

考察すると、小学校と同様に学習指導要領による学習指導を充実させることを学校課題として、学校経営を進めていることがわかる。小学校との違いは、語群の数が、平成30年度(2018年度)の方が平成28年度(2016年度)より少ない。これは、現学習指導要領と2020年度からの新学習指導要領の前倒しが小学校ほど進んでいないのか、各学校が求める学校課題解明の方向が集約され、関係性が強くなったものと考えられる。

以下図毎に、小中別、教育事務所管内別の学校課題の分析を示すこととする。

図－5 平成30年度河内地区小学校学校課題 出現語の関係性

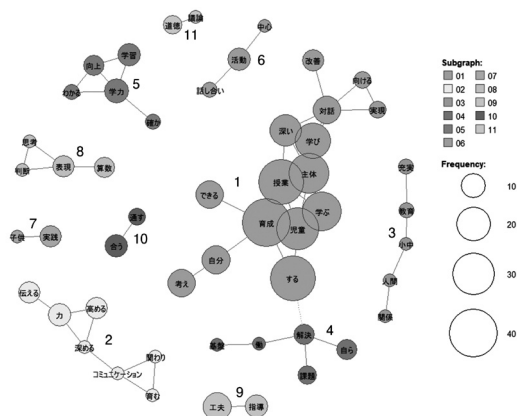


※ 出現回数の頻度数を最小値3、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

11の語群が見られる。1の語群は「自分」、「考え」、「表現」、「できる」の集まりから広く「活動」、「言語」等の関係がある。2の語群は最大72出現回数「する」、59出現回数「育成」、49出現回数「学ぶ」、46出現回数「児童」、他に「授業」、「主体」、「対話」、「深い」、「学び」等の関係がある。3の語群は「図る」、「充実」、「家庭」等が見られ、更に10の語群の「基礎」、「基本」、「定着」、「付ける」等が、1の語群とも広く繋がって大きな1つの関係群となっている。この他には、4の語群「コミュニケーション」、「能力」、「時間」、「地域」等、5の語群「展開」、「課題」、「解決」等、6の語群「学習」、「指導」、「工夫」、「育てる」等の単独グループも存在する。

考察すると、4つの語群は相互に関係し新学習指導要領による学習を充実させることを強く打ち出した学校課題を決めて学校経営を進めていることがわかる。即ち、「主体的・対話的な深い学び」、「学力の3要素である基礎・基本の確実な定着」、「言語活動の充実」について児童の学びの育成を目指している。また、コミュニケーションづくり、学習指導の工夫、課題解決、思考・判断、確かな学力、国語と読み、自ら考えるについては大きなグループでなく、学校独自の特色ある学校課題の設定と見ることができる。

図－6 平成30年度上都賀地区小学校学校課題 出現語の関係性

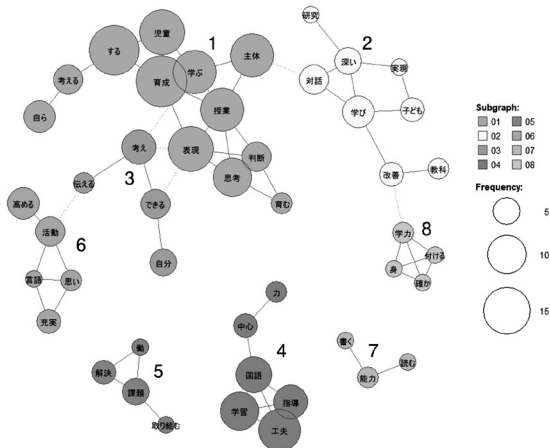


※ 出現回数の頻度数を最小値3、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

11の語群が見られる。1の語群は40の最多出現回数「育成」、35出現回数「する」、同出現回数「授業」、31出現回数「児童」、28出現回数「主体」、26出現回数「学ぶ」、22出現回数「学び」、他に「対話」、「深い」があり、4の語群「課題」、「解決」、「自ら」等とも関係付けられている。この他には、2の語群「コミュニケーション」、「高める」、「力」等、5の語群「学力」、「学習」、「向上」等、3の語群「小中」、「教育」等、6の語群「活動」、「話し合い」等、7の語群「子ども」、「実践」等、8の語群「算数」、「表現」等、9の語群「指導」、「工夫」等の単独グループも存在する。

考察すると、1の語群が地区内の大部分を占め新学習指導要領による学習を充実させることを強く打ち出した学校課題を設定し学校経営を進めていることがわかる。即ち、「主体的・対話的な深い学び」を授業と関係付けて児童の学びの育成を目指している。課題解決、国語学習の工夫、書く能力については独立した語群を形成している。また、コミュニケーションづくり、指導の工夫、算数、学力、話し合い活動、道徳等については大きなグループでなく、学校独自の特色ある学校課題の設定と見ることができる。更に当地区の特徴として地域性からの小中学校併設校として特色ある一貫教育の推進が進められている。

図－7 平成30年度芳賀地区小学校学校課題 出現語の関係性

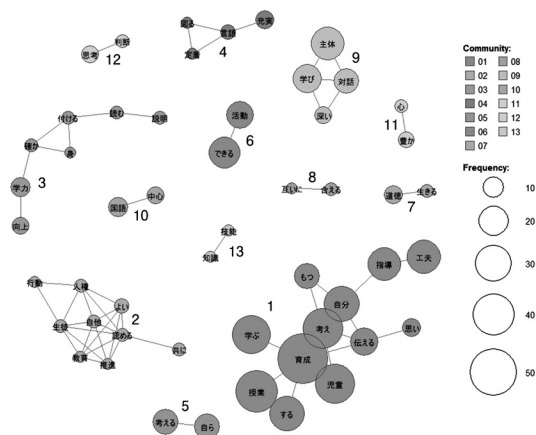


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

8の語群が見られる。これらは今回の抽出では1、2、3、6、8の各語群で関係付けられていた。中でも18の最多出現回数「育成」、17出現回数「する」、14出現回数「児童」、同じ出現回数「表現」、13出現回数「学ぶ」、同出現回数「主体」、「授業」については同じ1の語群に属している。他の3つの語群はそれぞれ独立している。4の語群で12出現回数「工夫」は「学習」、「指導」、「国語」等、5の語群「課題」、「解決」「取り組む」等、7の語群「能力」「書く」「読む」である。

考察すると、関係付けられている語群の内容は、授業を主体にした児童の育成を学校課題としていて、その内のいくつかの語群は新学習指導要領による学習を充実させることを打ち出した学校課題を設定して学校経営を進めていることがわかる。即ち、授業によって児童を育成させることを主眼としていて「主体的・対話的な深い学び」を授業と関係付けて児童の学びの育成を目指している学校課題の設定が見られる。この関係が大多数を占めているが、上記3つの独立した語群については、特色の有る学校課題の設定をしている。

図-8 平成30年度下都賀地区小学校学校課題 出現語の関係性

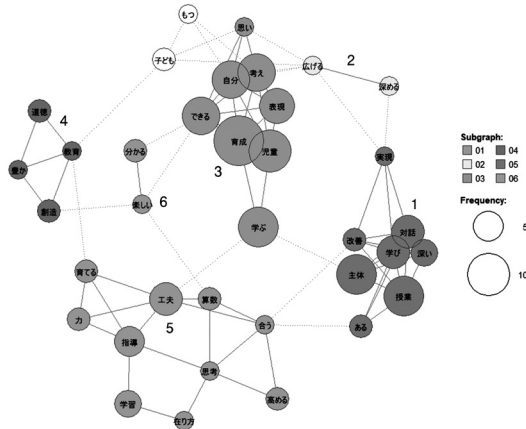


※ 出現回数の頻度数を最小値3、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

13の語群が見られる。1の語群は59の最大出現回数「育成」、41出現回数「授業」、37出現回数「考え」、36出現回数「児童」34出現回数「学ぶ」、29出現回数「自分」28出現回数「する」等がみられ最大の語群となっているが他の語群との関係は付けられていない。2の語群「自他」、「認める」、「よい」等、3の語群「学力」、「向上」、「確か」、「付ける」等、4の語群「言語」、「充実」等、6の語群「活動」、「できる」、7の語群「道徳」、「生きる」、9の語群「主体」、「対話」、「深い」、「学び」、などの語群は単独で存在している。

考察すると、1の語群が本地区学校課題の用語の大部分に現れ教育の不易の部分形成している。一方、新学習指導要領による学習を充実させることを強く打ち出した学校課題のもと学校経営を進めている学校の多いことが分かる。即ち、「主体的・対話的な深い学び」を授業と関係付けて児童の学びの育成を目指している学校課題が多い。道徳、自ら考える、思考、判断、心、豊かななどの数語を関係させた語群を形成して焦点化させた学校課題がある。また、多くの語を関係付けて広い内容としているものも見受けられる。

図－9 平成30年度塩谷南那須地区小学校学校課題 出現語の関係性

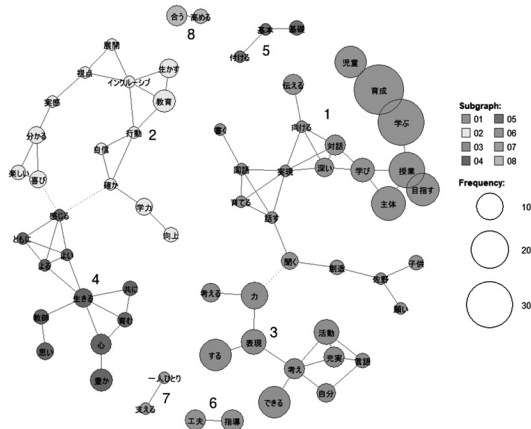


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

6の語群が見られる。3の語群は14の最大出現回数「育成」、10出現回数「児童」、9出現回数「学ぶ」、8出現回数「できる」、同出現回数「考え」、「自分」がある。また、全体が6つの語群に分けられながらも、全ての語群が関係付けられている。1の語群は9出現回数「主体」、同出現回数「授業」や「学び」、「対話」がある。2の語群「深める」、「広げる」や6の語群「分かる」、「楽しい」は、他の語群を結びつけるものとなっている。

考察すると、3の語群の「育成」、「児童」等の語を中心として、「主体」、「授業」、「対話」、「学び」、「深い」が強い関係性を持っている。出現回数は5以下と多くはないが「工夫」、「指導」、「学習」と関係性を持ち、多くの語を取り入れた学校課題も見られる。新学習指導要領で求められている学習内容である「主体的・対話的で深い学び」を授業の中で積極的に取り入れようとする学校課題と共に、道徳教育についても一定の学校での学校課題として設定されていることが見られる。楽しい、分かる、広げる、深める等はいくつかの学校課題の中に取り込まれている。

図-11 平成30年度安足地区小学校学校課題 出現語の関係性

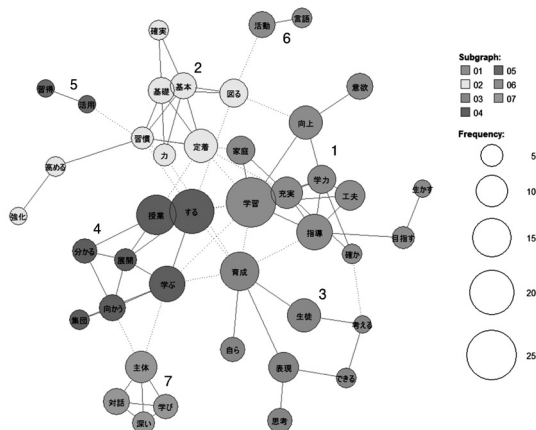


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

8つの語群が見られる。1の語群は35の最大出現語数「育成」、30出現語数「学ぶ」、18出現語数「授業」、16出現語数「主体」が同語群に含まれていて地区の最大語群を形成している。しかも、この語群は3の語群「できる」、「表現」、「力」、「する」、「活動」等と関係付けられている。2の語群「インクルーシブ」、「教育」、「生かす」、「分かる」等が、また、4の語群では「生きる」、「心」、「豊か」、「共に」、「感じる」は出現回数は少ないが関係付けながら存在する。さらに、単独で、「高め」、「合う」や「一人ひとり」、「支える」、また「指導」、「工夫」とした語群も見られる。

考察すると、学校数は多いが比較的語群の数が少ないことから、同様な学校課題が多く設定されていることが分かる。主体的に学ぶ児童を育成することと、新学習指導で求められている「主体的・対話的で深い学び」が関係付けられていることから、新学習指導要領の内容をかなり意識しながらも広い教育内容の学校課題を設定した学校経営が行われていることが分かる。これは前回の2年前調査した用語の関係と比べて、今回は新学習指導要領を強く意識している。

図-12 平成30年度河内地区中学校学校課題 出現語の関係性

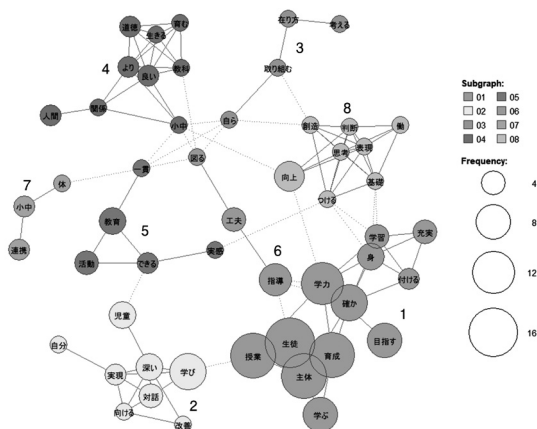


※ 出現回数の頻度数を最小値3、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

7の語群が見られる。1の語群は25の最大出現回数「学習」、13出現回数「指導」、他に「家庭」、「充実」、「向上」等があり、4の語群は20出現回数「する」、16出現回数「授業」、13出現回数「学ぶ」、他に、「分かる」、「向かう」等があり、3の語群は15出現回数「育成」、「生徒」、「表現」、7の語群「主体」、「対話」、「深い」、「学び」の4語のみが関係付けられている。5の語群「習得」、「活用」は2の語群の「習慣」と関係付けられている。6の語群「言語」、「活動」も2の語群の「図る」に関係付けられている。

考察すると、地区内の学校ではそれぞれ特徴ある学校課題を設定しながらも、地区内全体の用語の関係性が見られる。新学習指導要領で求める「主体的・対話的な深い学び」を学校課題の中心に据えて生徒の学びの育成を目指している学校課題も見られ、「授業を中心として生徒を育成する」等、教育の不易の部分が多く取り入れた学校課題により学校経営を進めていることが分かる。

図-13 平成30年度上都賀地区中学校学校課題 出現語の関係性

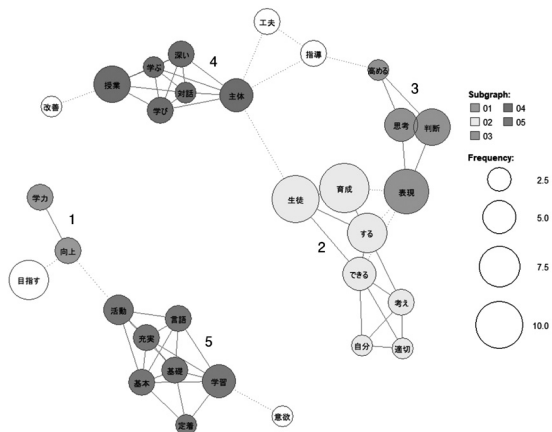


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

8の語群が見られる。1の語群は17の最大出現回数「生徒」、14出現回数「育成」、同出現回数「主体」、同出現回数「授業」、12出現回数「学力」等、上位出現回数の語群を全て関係付けている。「授業」と関係付いている「学び」を含む2の語群は他に「深い」、「対話」、「児童」等を含んでいる。6の語群「指導」、「工夫」、「図る」は1の語群の「学力」、「生徒」と関係付けられているとともに、8の語群「向上」、「基礎」、「思考」、「つける」等多くの語群が関係しており、他の語群の多くの語とも結びついている。4の語群「道徳」、「いきる」、「より」、「良い」等の関係性も見られる。

考察すると、1の語群が地区内の大部分を占める語を含んでいて、内容も確かな学力の育成等、教育の不易な部分で占められている。一方、新学習指導要領による学習を充実させることを強く打ち出した「主体的・対話的な深い学び」を授業と関係付けて学びの育成を目指していることも見て取れる。また、この地区の特徴として、「児童」、「小中」、「一貫」の語が登場しており、中学校区での小中一貫教育の推進が図られていることが推察される。さらには、地区内の全ての語群は関係付けられていることから地区内で学校課題の共通性が見られる。

図-14 平成30年度芳賀地区中学校学校課題 出現語の関係性

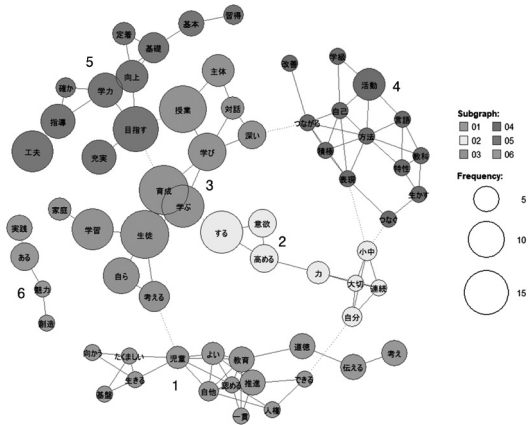


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

5の語群が見られる。語群は大きく2つに分かれる。1の語群は7出現回数「目指す」、「学力」、「向上」である。それに関係付けて5の語群があり、「学習」、「基礎」、「基本」、「充実」、「言語」、「活動」等がある。もう1つの塊は、2の語群で最大の11出現回数「育成」、10出現回数「生徒」に、「する」、「できる」と関係付けられている。3の語群は9出現回数「表現」に、「思考」、「判断」、「高める」と関係付けられ、2の語群と4の語群に関係性を持つ。4の語群は「授業」、「主体」、「対話」、「深い」、「学び」、「学ぶ」等が関係付けられている。

考察すると、地区内の語群の塊は、基礎・基本や学力向上を目指す学校課題を設定し、学校経営を進めているグループと、新学習指導要領の求める「主体的・対話的な深い学び」の語句を直接使った学校課題を設定し、学校経営を進めているグループに二分されている。

図-15 平成30年度下都賀地区中学校学校課題 出現語の関係性

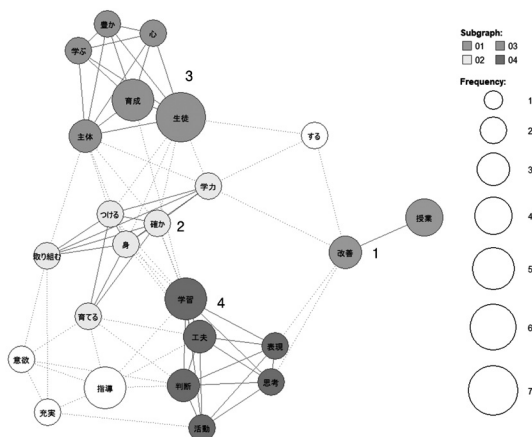


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

6の語群が見られる。6の語群を除いた、5つの語群は何らかの関係性を持った大きなグループと捉えることができる。1の語群は、各語の出現回数は少ないが、「道徳」、「教育」、「伝える」、「考え」、「推進」、「児童」、「たくましい」、「生きる」等、多く種類の語が含まれる。2の語群「する」、「意欲」、「高める」、「力」、「小中」等となる。3の語群は19の最大出現回数「育成」、18出現回数「生徒」、17出現回数「授業」、14出現回数「学ぶ」、11出現回数「学び」等、上位の出現回数の多く語が関係付けられている。4の語群は、「活動」を中心に、「学級」、「言語」等になる。5の語群は出現回数の多い語が多く、16出現回数「目指す」、13出現回数「工夫」を中心に、「学力」、「向上」、「指導」、「工夫」等が見られる。6の語群は単独で「実践」、「ある」等になる。

考察すると、地区内の大部分を占める語は何らかの関係性を持つ。学力としての基礎・基本的なことから、新学習指導要領で強く打ち出されている「主体的・対話的な深い学び」を授業と関係付けてある。義務教育学校との関わりで「小中」や「児童」の語が見られると考える。

図-16 平成30年度塩谷南那須地区中学校学校課題 出現語の関係性

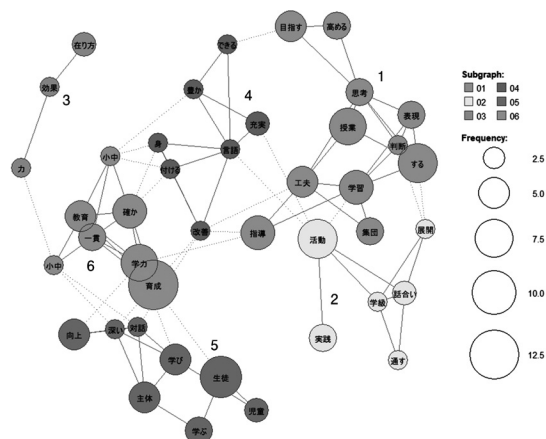


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

4の語群が見られる。全ての語群が関係付けられている。例えば、1の語群の「授業」、「改善」や、2の語群の「学力」、「確か」、「身」、「つける」等である。3の語群は7の最大出現回数「生徒」、5出現回数「育成」を中心にして「主体」、「心」、「豊か」、「学ぶ」が関係付けられている。4の語群は5出現回数「学習」を中心に「工夫」、「判断」、「表現」、「思考」等である。これ以外に「指導」、「充実」、「意欲」、「する」は多くの語と関係を持つ。

考察すると、地区内の各学校が1つのグループとして関係する語で学校課題が設定されて学校経営を行っている。その中でも特徴的なものは、心の教育に関わる語が多く占められている。また、授業改善に関係付けて強い方向性で学校経営を行っていることも見て取れる。学習の工夫については思考や判断の部分が多い。新学習指導要領の実施上の「主体的・対話的な深い学び」の用語については、1校にとどまり、図-16では現れていない。

図-17 平成30年度那須地区中学校学校課題 出現語の関係性

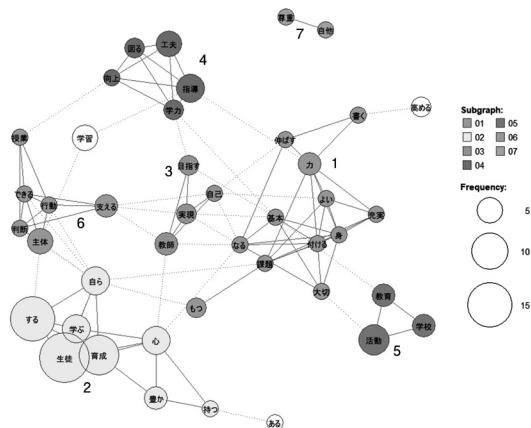


※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

6の語群が見られる。全語群が関係性を持っている。1の語群は8出現回数「する」、7出現回数「授業」、6出現回数「学習」、同出現回数「指導」の他に「目指す」、「高める」、「集団」、「思考」、「表現」等がある。2の語群では8出現回数「活動」に「実践」、「話し合い」、「学級」、「展開」等が関係付けられている。3の語群「力」、「効果」、「在り方」と少ない語で構成されている。4の語群「言語」、「充実」、「できる」、「付ける」、「豊か」等がある。5の語群は9出現回数「生徒」に「学び」と「学ぶ」、「主体」、「対話」、「深い」、「向上」、「児童」が関係付けられている。6の語群では13の最大出現回数「育成」、7出現回数「学力」、6出現回数「確か」等、上位の出現回数の語群が関係付けられている。

考察すると、全語群が関係付けられながら、多くの語が出現していることから、多様な学校課題を設定しつつも関係付けられた語で構成されていると言える。学校課題の多様性は、学校経営の多様性につながり特色ある学校経営がうかがえる。特に、学力や授業の工夫という教育の不易な部分があると同時に、新学習指導要領により、強く打ち出されている「主体的・対話的な深い学び」を直接の学校課題として取り上げている学校も見取れる。義務教育学校の存在で小中、一貫教育の語も用いられている。

図-18 平成30年度安足地区中学校学校課題 出現語の関係性



※ 出現回数の頻度数を最小値2、関係性を決める最上位60までの語群を抽出

7の語群が見られる。1の語群は出現回数は少ないが多くの語で構成されている。「力」、「付ける」、「基本」、「もつ」、「伸ばす」、「課題」、「書く」、「充実」等がある。2の語群は19の最大出現回数「生徒」、15出現回数「する」、12出現回数「育成」が含まれ当地区で最大の語群となっている。3の語群「教師」、「自己」、「実現」、「目指す」となる。4の語群「指導」、「工夫」、「学力」等である。5の語群「学校」、「教育」、「活動」の3語である。6の語群「主体」、「支える」、「行動」、「授業」、「できる」等である。7の語群は「自他」と「尊重」の2語である。

考察すると、全ての語が群を構成しながらも関係付けられている。生徒自ら学ぶことが地区の大きな学校課題の共通性になっている。教育の不易な部分である。一方、新学習指導要領にあり、学習を充実させることを強く打ち出した「主体的・対話的な深い学び」をそのまま学校課題としているよりは、語として適宜取り入れたものになっている。

4 実践事例

以下に、学校課題と学校経営の在り方を根本的に見直そうと企画された、小山市立大谷東小学校の学校課題研究の計画を紹介する。ポイントは、学校課題のテーマを学校教育目標と定め、目指す児童像に迫るための手立てを教職員に考えさせるという、ユニークな計画となっている点である。

「教職員の研究意欲と学校経営参画意識を高める学校課題研究の変革」

～個人研究奨励による学校教育目標実現の最大効率化～

（１）学校教育目標実現のためのベクトルを束ねるために

① 県内小中学校における学校課題研究

多くの学校では、教科領域あるいは〇〇教育などの内容で研究主題を設定し、いくつかの研究部に職員を所属させ全校体制で実施する場合が多い。また、研究仮説の検証のために研究授業を行い、授業研究会で成果を確認する流れが一般的である。

この方法は長年培われてきたオーソドックスな方法であり、研究過程で教員が切磋琢磨し資質・能力の向上を図るという「研修」としての側面を併せ持っている。

② これまでの学校課題研究への疑問と改善のための構想

ア 研究の深まり

全校挙げての研究は一体感を醸成し、一つの目的に向かっていくという美しさを持つ反面、年間１回または２回程度の公開授業を前提とするため、授業中心に研究が進行し、研究主題に迫るための研究の部分や仮説の検証が不十分となりがちであり、実践の域に止まる場合が多い。そのため、研究が深まった実感が得にくいことや授業者の負担と比べ授業者以外は手応えが感じにくいことなどが課題であると感じる。

イ 研究の効率

授業を練り上げていく過程では、意見交換を通して様々な学び

があることは事実だが、大勢の人間で話し合うことは、1つの時間軸で1人しか話せないため、効率が上がらない。そのため、長時間かけて議論することを余儀なくされる。

昨今、教員の時間外勤務が問題となり、児童生徒を指導しなくてよい時間は一日の中で1時間にも満たない現状からは、研究の複線化を検討する時期にきているのではないかと考えた。

ウ バクトルを束ねるためのテーマ設定と意欲を高める研究スタイル

学校には解決を迫られる教育的課題が山積しており、校長はこれらの多くを解消することを期して学校教育目標を定めているのだが、学校課題研究テーマの設定によっては、学校の向かうべきバクトルが分散する危険もはらんでいる。そこで、学校の向かうべき目標である学校教育目標実現のためのバクトルを揃えることを重視し、研究テーマを学校教育目標とすることとした。その一方では、研究の複線化と個人の研究意欲を引き出すために、自分のキャリア段階に応じて個人が直面する課題を研究することとした。個人の課題解決と学校教育目標の実現は親和性が高いとの確信を持っている。

（２）学校教育目標を研究テーマとした学校課題研究推進計画

本校では、（１）で述べたとおり、研究課題を学校教育目標とした2019年度の学校課題計画を定めた。研究の方法としては、学校教育目標を踏まえた個人の課題を設定して、類似的なテーマ同士でグループを編成し、年間複数回の報告会で自作レポートに基づく発表・協議により評価を受け、次の実践を企画・実践するといったPDCAサイクルで研究を深める。利点は、誰かのための研究ではなく、自分の研究についてグループ全員から意見を参考に自ら改善することを通して、個人の欲求を満たしつつ、学校教育目標の実現が図れる点である。

(3) 研究計画の実際

平成31年度 学校課題研究推進計画

1 研究主題

学校教育目標「心と体を自ら鍛え、楽しく学び合い、

主体的に生きる児童の育成」

～自分を鍛える子・自ら学ぶ子・自分で考え行動する子の育成を通して～

2 研究主題設定の理由 (略)

3 研究の仮説

学校経営計画に示された教育目標実現のための平成31年度の努力点(3つの児童像の細分化による視点の例)等を踏まえて、より具体化した研究、または教職員一人一人が直面しているテーマについての研究や、第5期科学技術基本計画の中のSociety5.0に示された、超スマート社会の実現に向けた学びの在り方に関する研究など、自由な発想・組織で計画的に進めることで研究主題に迫りたいと考える。これからの社会を指向した「主体的に生きる児童を育成する」ことができ、学校教育目標も達成されるであろう。

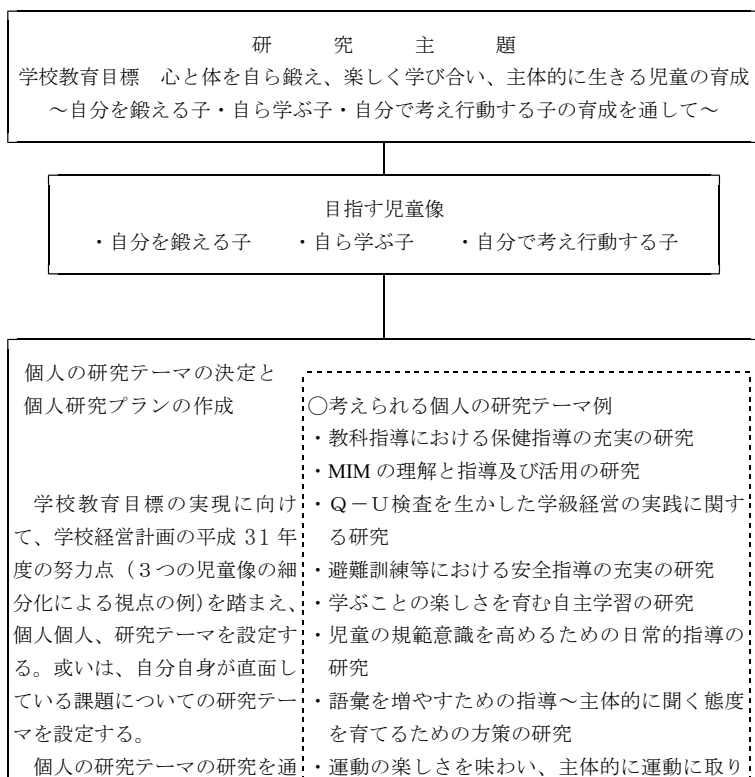
4 研究の方法

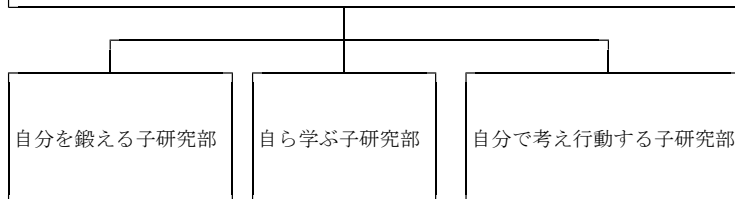
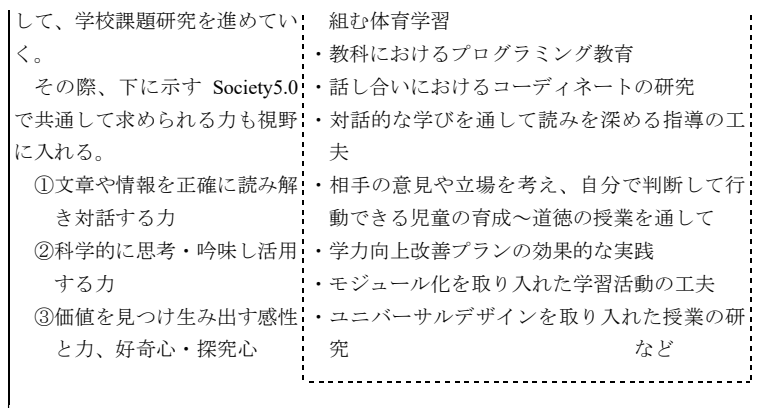
- (1) 教師一人一人が実態を把握・分析し、自らが直面する課題を研究テーマとする。
- (2) 個人の研究プランを作成し、個人の研究テーマに沿った研究の仮説を立て、方法を工夫し、実践・研究を進める。
- (3) 研究テーマによっては、学年の枠を超えて似たテーマの者同士でグループを作り研究を進めたり、新年度に組んだ学年で研究テーマを決めたりして研究を進めても良い。(ただし、個人の研究プランは必ず作成する。)
- (4) 授業を公開する場合は、指導略案を用意し、授業を公開する。授業公開は何回してもよい。授業で検証しにくい研究テーマの場合は、研究プランの実践内容の経過が分かる資料を用意しグループ

協議により研究を進める。

- (5) 本校は大規模校であることから学校課題研究は、各部会研修を原則とする。研修に参加する際には、必ず、個人プランの実践に関する資料を用意する。
- (6) 年度の前期（夏休み中）と後期（冬休み明け）に研究の成果・課題の発表と個人研究プランの改善策を策定する。その際、研究の成果と課題を共有し、学校教育目標の実現に寄与するかを検討する。
- (7) 年度末に個人プランのまとめを作成し、部長を中心に研究部毎に発表会を実施し、成果と課題を確認する。研究部長は成果物をまとめ研究主任に提出する。

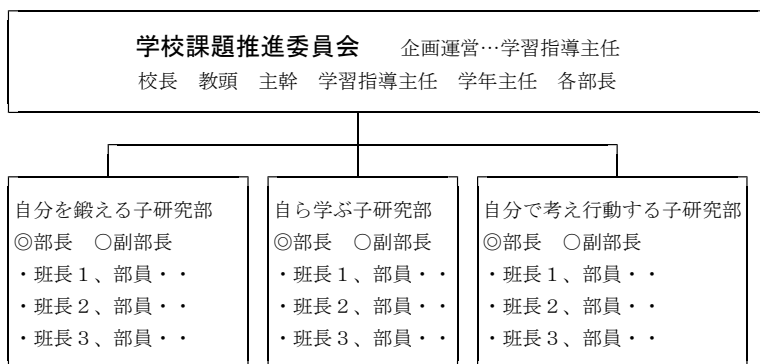
5 研究推進構想





(基本は個人研究。部内に類似テーマの小グループを作り、互いに切磋琢磨する。)

6 研究組織及び研究計画



回	研修日	研修名	内容
1	4月2日	学校課題推進委員会1	研究推進計画検討・決定
2	4月5日	学校課題研修①	研究推進計画概要説明
3	5月29日	学校課題研修②	個人研究テーマ・個人プランの作成 研究組織作り
4	6月26日	学校課題研修③	個人・グループでの研究、公開授業計画
5	7月23日	学校課題推進委員会2	推進状況の確認・計画の修正
6	8月5日	学校課題研修④	個人・グループでの研究
7	8月19日	学校課題研修⑤	個人研究成果・課題発表（グループ）
8	8月30日	学校課題研修⑥	練り直した個人プランの発表
9	9月4日	学校課題研修⑦	個人・グループでの研究、公開授業考察等
10	9月11日	学校課題研修⑧	個人・グループでの研究、公開授業考察等
11	10月23日	学校課題研修⑨	個人・グループでの研究、公開授業考察等
12	11月13日	学校課題研修⑩	個人・グループでの研究、公開授業考察等
13	1月15日	学校課題研修⑪	今年度の研究のまとめ・発表
14	2月14日	学校課題推進委員会3	次年度の計画検討

※学校課題研究は各部会研修を原則とする。

部会での話し合いには、必ず、個人プランの実践に関する資料を用意する。

5 考察と今後の課題

栃木県内全小中学校の学校課題を平成28年度（2016年度）と平成30年度（2018年度）の2度にわたり収集、分析を行った。県内全体での比較は年度経過に従い行った。県内7教育事務所管内地区毎については、平成30年度（2018年度）についての分析となった。またページ数の関係で各学校の学校課題を掲載できなかったことや、分析を詳細に記載できなかったところもある。

以下に見い出せた主な特徴をあげる。

- ・児童生徒の「学力」と「育成」との関係は、中学校の方がより強い関係性があった。
- ・小学校には、新学習指導要領で求められている内容の部分が多く見られた。具体的には道德教育に関する語であったり、主体的・対話的で深い学びに関する語の採用であった。また、「アクティブ・ラーニング」の語を挙げた例は、平成30年度においては見られなかった。

- ・心の教育に関しては、小学校の方が関係する語が多くあった。
- ・中学校では2回の調査とも「生徒」が最大多数の出現であり、小学校の「児童」の扱いと差があった。
- ・教育事務所毎の分析では、地区ごとの違いが特徴として見られた。

地区全体が関係性のある語群で構成されている場合、特に多くの語群でありながら関係性を保っている場合と少ない語群で構成されている場合が見られた。また、語群毎に関係性が見られず独立している地区もあった。

学業指導に関連する「学業」の語は、平成28年度は小学校5回、中学校9回という出現数であり、学業指導における2本柱である、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」と関係性が見られる学校課題は多くあった。学業指導に関しては、文部科学省編平成22年3月版「生徒指導提要」のP18に紹介されているとおり、児童生徒一人一人の自己実現（社会的自立）を図っていくための指導・支援としての教育活動である。しかし、平成30年度は減少した。これは以下の理由によるものと考えられるが、内容を学校毎に見ると同意義の学校課題が散見された。学業指導の語は直接使われなくてもその必要性は不易な部分である。

現在、次期学習指導要領の完全実施を見据えた変化の時期であることから「どのように学ぶか」における、「主体的・対話的で深い学び」に関する語が多く和学校で見られた。平成31年度以降は更に「対話」、「深い」、「学び」等の用語を取り入れてくる学校が多くなることが考えられる。

教育は、過去から現在未来へと脈々と続く不易の部分と、時代に応じた流行の部分がある。この不易と流行を取り入れ、「学校力」を高めていくことが重要となってくる。その根本には、教員一人一人の高い指導力が望まれる。

今後、チーム学校の展開と共に学校経営の推進にあたっては、学校経営方針の下、全教職員で学校課題を共有して解決に努力していく「学校力」向上を目指し、児童生徒を成長させる学校の組織的な働きを高めていくことが、更に大切になってくる。

最後になりますが、データ分析等で本学の大木俊英先生には大変お世話になりました。

引用文献・資料

- ・栃木県総合教育センター編「とちぎの「学校力」の向上」栃木県教育委員会平成25年
- ・白鷗大学教育学部論集2017.11（1）P201~229 金井正・大木俊英 著「栃木県内全市町小・中学校の学校課題の収集と分析（1）～テキストマイニングの手法を用いて～」白鷗大学平成29年
- ・平井明代 編著「教育・心理・言語系研究のためのデータ分析 研究の幅を広げる統計手法」明治図書 2018年、特に大木俊英著部分「第10章テキストマイニング」